

Title	「沈む」島の現在： ツバル・フナフチ環礁における居住を巡る一考察
Sub Title	The present of "Sinking Turalu" : a case study of the residential area in Funafuti
Author	深山, 直子(Fukayama, Naoko) 石森, 大知(Ishimori, Daichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2010
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.79, No.3 (2010. 7) ,p.57(267)- 75(285)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20100700-0057">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20100700-0057</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 「沈む」島の現在

——ツバル・フナフチ環礁における居住を巡る一考察——

深山直子  
石森大知

一 はじめに——「沈む」ツバル？

オセアニアの貿易風帯には多数のリング状のサンゴ礁、すなわち環礁が点在している。ツバルはそのなかでポリネシアと呼ばれる地域の西端に位置し、九つの環礁・リーフ島から構成される島嶼国である。<sup>(1)</sup> 一般に環礁のリングの内側には水深の浅いラグーンが、外側にはサンゴ礁原が形成されており、サンゴ礁原のさらに外側には外洋が広がっている。環礁ではサンゴ礁原のうえに有孔虫やサンゴの砂礫が堆積すると、低平な環礁州島が形成される。「山口・甲斐 二〇〇七」。環礁州島の地形は通常、外洋側に台風や津波の時に打ち上げられたサンゴ礫から形成された凸地であるストームリッジ、内陸部の中央凹

地、ラグーン側に沿岸流によって打ち上げられた有孔虫の砂から形成された凸地であるビーチリッジから成り立っている [Yamano et al. 2007]。ツバルの国土のほぼ全ては、このような環礁州島から構成されており、その総面積は約二六平方キロメートルと非常に小さい(図1)。ツバルの人口は九五六一人を数えており、<sup>(2)</sup> その大半がポリネシア系住民であるが、若干のミクロネシア系住民も含んでいる。自家消費的な農業・漁業が主たる生業で、現金収入は多国籍の漁船からの入漁料や海外で出稼ぎするツバル人からの送金に依存している状態である。<sup>(3)</sup>

九つの環礁・リーフ島は、かつてエリス諸島と称され、現在のキリバスの一部であるギルバート諸島とともに、ギルバート・エリス諸島として一八九二年よりイギ

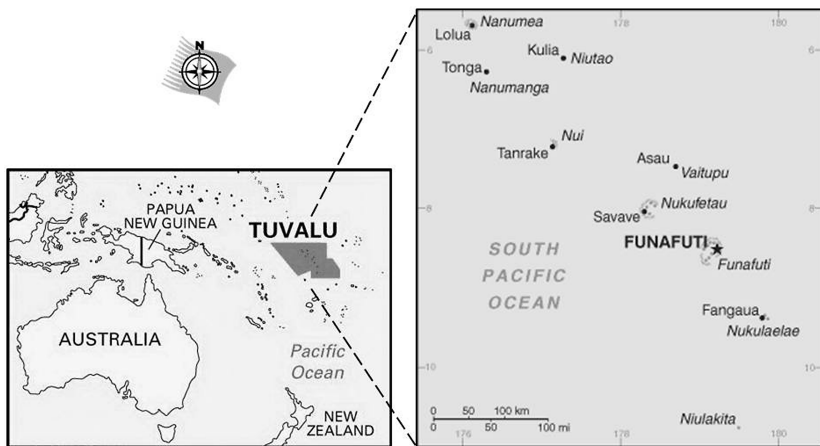


図1 ツバルの位置(左)とフナフチ環礁の位置(右)

※ 左は国連のホームページより抜粋 (<http://www.un.int/wcm/content/site/tuvalu/cache/offonce/pid/3712> 2010年1月20日現在), 右はアメリカ中央情報局のホームページより抜粋 ([https://www.cia.gov/library/publications/the-world-factbook/maps/maptemplate\\_tv.html](https://www.cia.gov/library/publications/the-world-factbook/maps/maptemplate_tv.html) 2010年1月20日現在). 筆者加筆.

リスの保護領になった。一九一五年には植民地となり、一九七五年にギルバート諸島と分離してツバルと称されるようになった。イギリスから独立を果たしたのは、一九七八年のことである [e.g. Teo 1983]。

一九八〇年代以降、国際的に地球温暖化が関心を集めるようになり、それに起因するとされる海面上昇に関して盛んな議論がなされるようになった [例えば、ワート二〇〇五、Church et al 2006, Eschenbach 2004a, 2004b, Hunter 2004]。環礁州島の地形にはストームリッジ、ピーチリッジという相対的な凸地があるとはいえ、その平均海拔は極端に低く数メートルに留まる。こうしてツバルは、同様の地形的特徴を有するキリバスと並んで、海面上昇に起因する水没や浸水、浸食、塩害といった災害を被る可能性が最も高い国であると指摘されるようになった。人口、国土面積、GNP等の観点からは極小国家であるにも拘らず、環境問題という脈絡の中で「沈む」「消える」といった枕詞とともに、短期間のうちに国際的に広く知られるところとなったのである。

ところで、欧米は大航海時代から太平洋の島嶼に対して、「小さい」、「弱い」、「隔絶」、「辺境」、「非歴史的」、「伝統」前近代的、「均質的」等の偏見を抱いてきた

「春日 一九九九」。海面上昇を巡る議論が活発になって以降、ツバルに向けられるまなざしの中で、こうした既存の「オセアニア・オリエンタリズム」が強化されていると考えられる [Farbotko 2005]。また、地球温暖化の人為的原因とされる温室効果ガスに關し、ツバルを始めとする資源や経済力に乏しい極小国は産業化が進む大国に比べるとほぼ排出していないに等しいという事実が強調され、ツバル人にはさらに否応なく負の結果を背負わされた「被害者」、「犠牲者」といったイメージが付与された [神保 二〇〇七、石田 二〇〇七]。こうして、「沈むツバル」、「被害者としてのツバル人」という言説やイメージが海面上昇と直接に結び付けられて反復されるようになった。

Farbotko はこのような状況を前に、オーストラリアの新聞記事の分析を試み、ツバル人が未曾有の「悲劇」にみまわれて移住する以外に選択肢を持たない人々として「デイスエンパワメント」(disempowerment) されて描かれてきたことを明らかにした [Farbotko 2005]。さらに Monteux と Barnett は、研究者並びにマス・メディアが、環境変動に対する太平洋の島々の脆弱性に偏って焦点を当てた上で、それを理由にツバルから他国への

大規模な移住が生じている／生じるだろう／生じるべきだという議論を展開していると論じた。そしてフナフチ環礁 (Funafuti) でのインタヴュー調査から、実際には現地住民にとって気候変動は主たる懸念事項ではなく、また移住の理由でもないことを明らかにした [Monteux and Barnett 2009]。また玉井は、ツバルにおいて気候変動の影響ばかりが目される半面、「内発的な」環境問題が看過されてきたという反省のもとで、現地調査に基づき国内で深刻化する廃棄物処理問題の現状と課題を指摘した [玉井 二〇〇五]。あるいは小林は、ナヌメア環礁 (Nanumea) でのインタヴュー調査から、現地住民がマス・メディアにおける海面上昇の言説の影響を受けて、ローカルな自然現象を解釈するようになってきていることを論じた [小林 二〇〇八 a、二〇〇八 b]。

これらの先行研究は、ツバル及びツバル人に対するステレオタイプな言説やイメージを、その内容や形成過程、普及・波及過程を明らかにすることによって、批判的に捉えることに成功している。しかしながら、言説やイメージと対照されるべきローカルな実態の踏み込みに足らず、現代のツバルではツバル人がどのように生きているのか、ということを具体的に描き出す民族誌的情報に欠

けていると思われるのである。このような問題意識から本稿では、ツバルの政治的・経済的中心であるフナフチ環礁フォンガファレ島 (Fongatale) において実施した文化人類学的調査を踏まえて、市街地における居住を巡る実態の一端を捉えることを目的とする。

全体の構成としては、次の第二章では統計資料からツバルとフナフチの人口動態の特徴を指摘する。第三章では現地調査の基礎的情報をまとめ、続く第四章、第五章では調査で得たデータを基に居住地と住民の変遷を明らかにする。第六章ではそれらの結果について考察を試みる。

## 二 人口の増加と集住

### ——「重くなる」フナフチ環礁

調査結果を論じるにあたり、その背景としてツバルにおける近年の人口動態に言及しておきたい。一九二一年時の総人口は三四五七人で、一九四七年は四四八七人、一九六八年は五七八二人とその数は比較的穏やかに増加していった [Tuvalu Central Statistics Division n. d.: 13]。ところがキリバスと分離した一九七〇年代半ばからツバルとして独立を果たす一九七八年にかけて、それまでツ

バル外で出稼ぎしていた人々が戻ってくるようになった。特に、現在キリバス領内にあるバナバ島 (Banaba Island) のリン鉱山が、一九七九年にリン枯渇のため閉山したことは、この傾向に拍車をかけた [Faaniu 1983]。

その結果、人口は一九七九年は七三四九人、一九九一年は九〇四三人、そして二〇〇二年には九五六一人を数えるまでになっている [Tuvalu Central Statistics Division n. d.: 13]。

人口増加の動向に並行して、首都が所在するフナフチ環礁に居住が一極集中するようになった。九つの環礁・リーフ島のうち、フナフチ環礁に居住する人口割合は、一九六八年には一四・三％に留まっていたが、一九七九年に二八・八％になり、一九九一年には四二・五％、二〇〇二年には四六・三％と急増した [Taataki 1983: 28, Secretariat of the Pacific Community 2005: 15] (図④)。

フナフチ環礁内では統計によると、フォンガファレ、フナファラ (Funafala)、アマトウク (Amatuku) という三つの環礁州島に居住が認められるが、フナフチ環礁の人口の九八％はフォンガファレ島に居住しており、さらにその七一％が島内のいわゆる市街地に居住している [Tuvalu Central Statistics Division n. d.] (表一)。ツバ

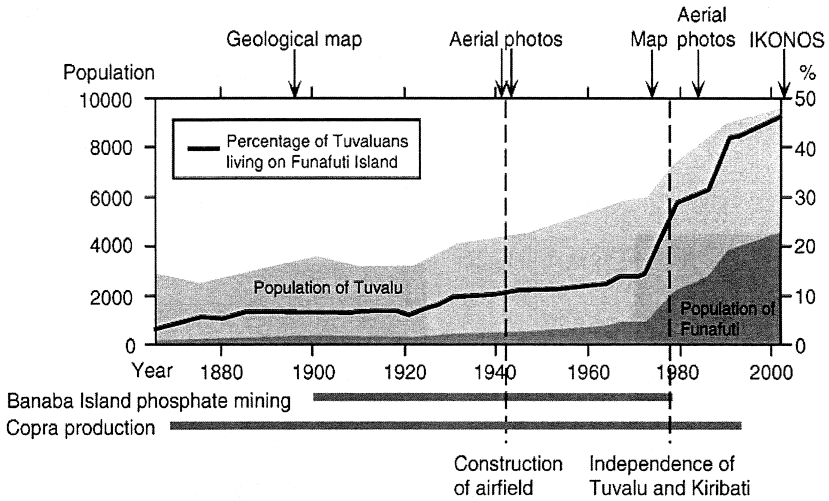


図2 ツバルにおける人口増加と都市化

※ Yamano et al (2007:413) より抜粋.

表1 フナフチ環礁における人口分布

フナフチ環礁							フナファラ島	アマトック島
フォンガファレ島								
市街地				非市街地				
ファカイ フォウ	セナア	アラビ	ヴァイ アク	ロフェ アガイ	テオネ	テカヴァト ウエトウエ		
1007	589	1024	516	399	540	343		
3136				1282				
4418							22	52
4492								

※1 [Tuvalu Central Statistics Division n. d.] のデータを基に、筆者作成。

※2 数字の単位は全て「人」。

ルの総人口が急増してきたと同時に、フォンガファレへの集住が急進してきたことが明らかである[Yamano et al. 2007]。

### 三 調査概要

第二章で統計資料から指摘したように、人口動態が急激に変化している事実だけを鑑みても、ツバル人を静態的に捉えられないことは容易に推測できる。このことを踏まえて筆者らが行なったのが、フォンガファレ島の人口・住宅密集地である市街地における調査である。その期間は二〇〇九年三月一〇日から一七日までと短かったために、調査開始時にサンプルとしての調査対象地区を設定することとした。北東はヴァオ通り(Vao Road)とその延長の小径に、南西はトコトゥ通り(Tokotu Road)とその延長の小径に、そして北西はラグーンに、南東は滑走路に囲まれたところがそれである(図3、後出の図4-1・2も参照)。この地区のなかを、ラグーンの海岸線と滑走路に並行して走る二本の幹線道路、フォンガファレ道路(Te Anuala o Fongafale)とツバル道路

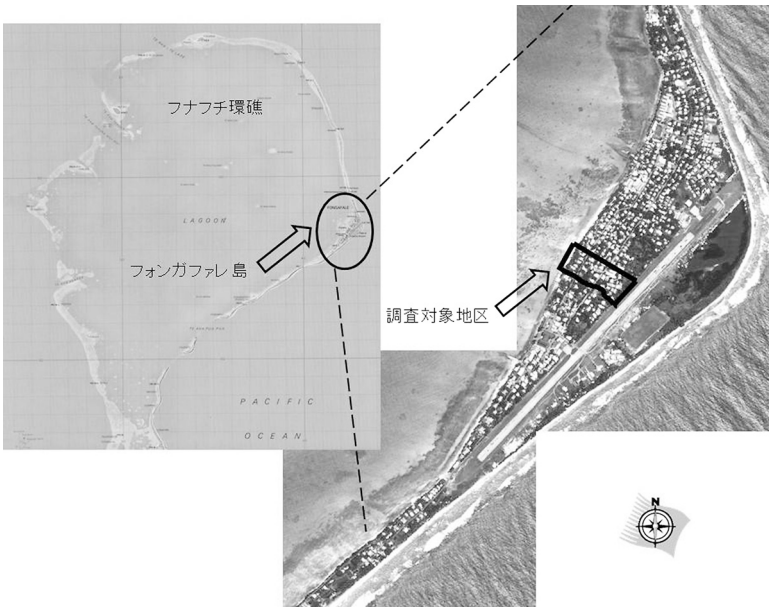


図3 調査対象地の位置

※ 左は [Government of Tuvalu 1980] に筆者加筆, 右は高解像度衛星データ (QuickBird) に筆者加筆.

(Te Anata o Tuvalu) が横断している。なお、滑走路を南東の端とした理由は、それより南島側に建築物が存在せず、居住者がいないからである。

ところで山野らは二〇〇七年の論文で、過去の地図、航空地図、そして衛星画像の解析から、土地利用／被覆及び建築物分布の変遷の再構築を試みた。そのなかでフオンガファレ島の集落は一八九六年時点では北部の教会を中心としてラグーン側のビーチリッジ上に形成されていたが、一九四一年には南部のビーチリッジ上にもう一つ集落が形成されていたことを指摘した。そして一九七四年時点には集住区が、北部の集落と南部の集落の間や北部の集落のさらに北側に拡張し、ビーチリッジ全体を占めるようになり、さらにビーチリッジと滑走路の間にも拡張していったことを明らかにした [Yamano et al. 2007]。現在ではフオンガファレ島の市街地は一続きに繋がっているように見えるが、現地では北部セナラ (Senalala)、南部ヴァイアク (Vaiaku)、中間部アラピ (Alapilapa)、最北部ファカイ・フォウ (Fakai Fou) の四地域に分かれていると認識されており、例えば人口統計資料にも四地域に分けたデータが存在する [Tuvalu Central Statistics Division n. d.]。今回の調査対象地区は、アラピに

位置しており、二〇世紀後半に市街地となったところであると考えられる。

さて、調査対象地区におけるローカルな実態の一端を捉えるにあたって、今回の調査では区内の居住地と住民の特徴を、近年における時間的・空間的变化に留意しながら析出することを試みた。そのために第一に、二〇〇九年現在における建築物の分布図を作成した上で、それを一九七三年撮影の航空写真を基に作成された一九八〇年公刊の地図と比較検討し、建築物の数と分布の変化を明らかにした [Government of Tuvalu 1980]。第二に、居住地の位置やその建設時期に偏りがいないことに留意した上で九人の住民を選出し、自由対話形式におけるインタビューを行い、彼／彼女らの出身地とこれまでの居住歴を明らかにした。<sup>(4)</sup>

#### 四 居住地の変遷

作成した分布図と公刊されている地図の比較検討の結果、調査対象地区には一九七三年時点では三一戸の建築物が存在したと推定できるが、二〇〇九年にはその数が倍近くの五七戸に増加していることが明らかになった。さらに個々の建築物を照合していくと、一九七三年時に



は確認できたが二〇〇九年に確認できなかった建築物は一戸のみで、二七戸は新築されたと考えられる。一方、一九七三年時の建築物に増築が施されたケースも多いことがわかった。建築物はほぼ全て個人の住宅であることを考えると、居住地の拡張と住民の増加が急速に進んだことが指摘できる(表2)。

より詳しくみていくために、便宜上調査対象地区を二本の幹線道路で三分割し、各セクションを「ラグーン側」、「内陸部」、「滑走路側」と呼ぶことにしたい(図4-1・2)。第一章で指摘した環礁州島の地形の特徴を考慮するならば、「ラグーン側」にビーチリッジが、「内陸部」と「滑走路側」に中央凹地が対応することになる。

さて、一九七三年時にはこれら三セクションに存在する建築物はほぼ同数であった。しかし現在では「滑走路側」、「内陸部」、「ラグーン側」の順に多くなっている(図4-1・2)。すなわちその順番で、建築物の増加率が高いということになる(図5)。

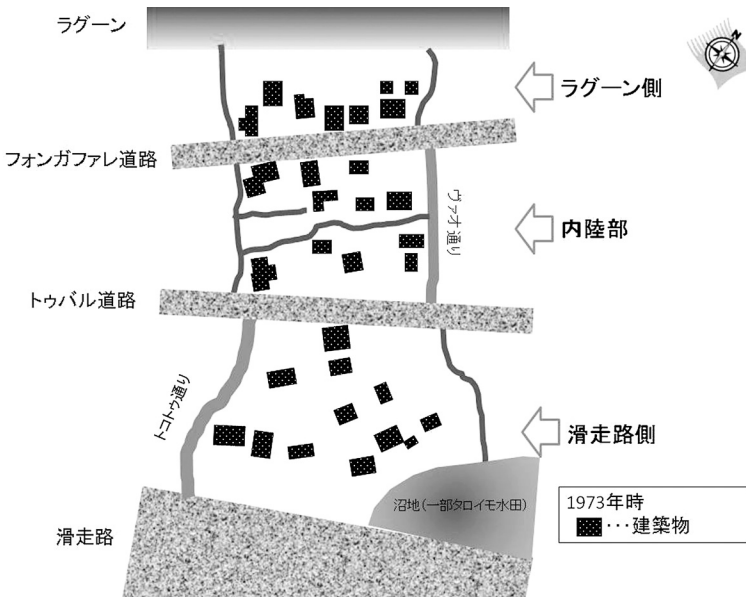


図4-1 1973年時の建築物を示す地図

表2 建築物数の変化

年	1973年	2009年	変化数
ラグーン側	9	12	増加4, 減少1
内陸部	11	20	増加9, 減少0
滑走路側	11	25	増加14, 減少0
合計	31	57	増加27, 減少1

※1 単位は全て「戸」.

※2 増築は戸数の増加と数えていない.

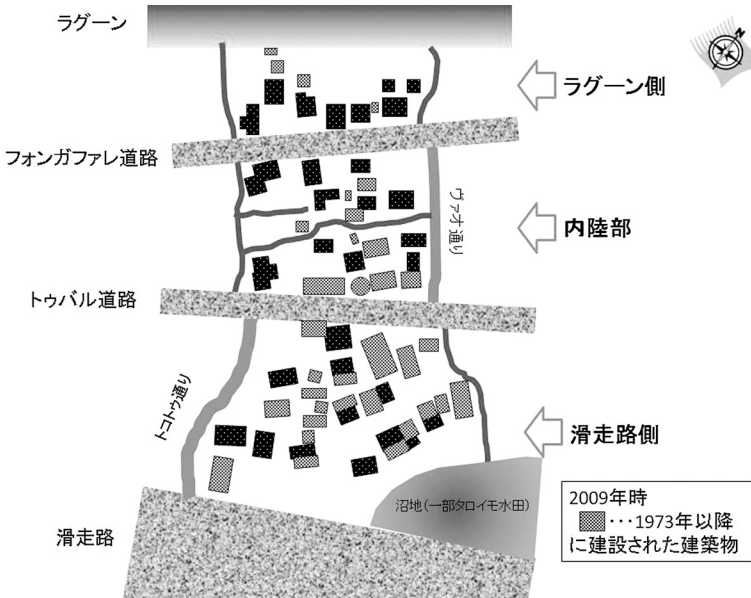


図4-2 2009年時の建築物を示す地図

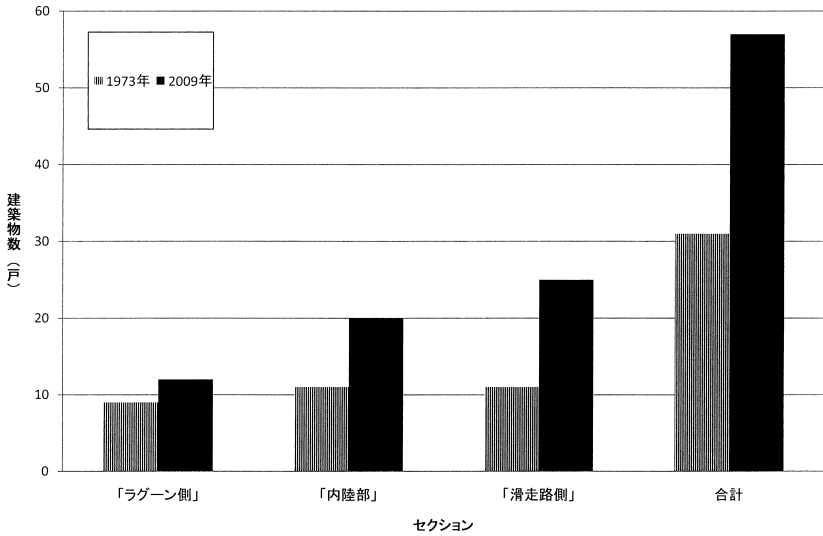


図5 セクションによる建物数の変化

## 五 住民の変遷

九人の住民を対象としたインタヴューの要点は、表3にまとめられる(表3)。帰属意識を有する出身地を環礁・リーフ島レベルで尋ねる質問に対しては、フナフチと回答した人が二名、ニウタオが三名、残りの四名はそれぞれ、ナヌメア、ヴァイトゥプ (Vaitupu)、フィジー (Fiji) のキオア島 (Kioa) とヴァイトゥプ、ニウタオ (Niutao) とフナフチ、と回答した<sup>(5)</sup>。この事実から、この地区では地元フナフチ環礁出身者は少数派で、むしろ多様な他島からの出身者が多数派であることが推測される。

さらに詳しくライフ・ヒストリーを聞いていくと、九人の誰一人として移住のコースが、「出身地→現居住地」という単線におさまらないことが明らかとなった。

紙面の関係上、内四人の移動歴を以下に簡単にまとめる。

A氏(グラフ番号1)・男性・一九八三年生ニウタオ出身  
 一九八三年に、フナフチで生まれたが、生後すぐにニウタオに移動した。両親ともにニウタオ出身であり、これまでの人生のほとんどをそこで暮ら

表3 インタビューを行った調査対象地区住民9人の属性

(本文中における仮名)

番号	性別	出生年	職業	住宅	居住セクション	出身地(環礁)	
1	男	1983	無職	新	ラグーン側	ニウタオ	…A氏
2	男	1949	無職(退職済み)	古	ラグーン側	フナフチ	…B氏
3	女	1951	宗教施設管理者	古	内陸部	ニウタオ	
4	男	1928	無職(退職済み)	新	内陸部	ニウタオ	…C氏
5	男	1985	官公庁職員	新	滑走路側	フナフチ	
6	女	1953	教師	古	滑走路側	ヴァイトゥップ・ フィジーのキオア島	
7	女	1955	教師	新	内陸部	ナヌメア	…D氏
8	男	1944	無職(退職済み)	古	滑走路側	ニウタオ・フナフチ	
9	男	1923	無職(退職済み)	古	内陸部	ヴァイトゥップ	

※ 「住宅」に関しては、1973年時点で既に確認できるものを「古」、2009年時点で新たに確認できるものを「新」としている。

してきたために、ニウタオを出身地と考えている。父親が心臓の病気を抱えており、フナフチでのみ病院で治療を受けることが可能だ。そのため、フナフチ出身者と結婚しフナフチに居住している姉を頼って、二〇〇七年にフナフチに移動した。まだ結婚はしておらず、またフナフチでは特定の仕事についていない。現在は両親や姉の家族ら八人で、姉の夫方の親族が所有する土地に建つ家に住んでいる。

B氏(グラフ番号2)・男性・一九四九年生・フナフチ出身  
一九四九年に、フナフチの伝統的指導者層の家に生まれた。一九六六年ごろにギルバート・エリス諸島の首都が所在したギルバート諸島タラワに移動した。そして植民地政府のもとで配管工として働いた。一九七二年にタラワでギルバート諸島マラケイ出身の女性と出会い、結婚した。一九七六年にフナフチに戻り、一九八一年までは再び配管工として働いた。一九八一年からは警察官を務めるようになり、一九九五年に退職した。現在は妻や息子家族ら二人で、自分が所有する土地に建

つ家に住んでいる。

C氏(グラフ番号4)・男性・一九二八年生・ニウタオ出身

一九二八年に、母の出身島のヴァイトゥップで生まれた。ただし父はニウタオ出身であるため、ニウタオを出身地と考えている。ヴァイトゥップの学校に通っていたが、一九四五年にフィジーのスヴァに移動し高等教育を受けた。一九四八年に卒業し、士官候補生として船上訓練を始めるが、船酔いに耐え切れず数か月で辞め、ギルバート諸島タラワで植民地政府のもとで警察官となった。一九五一年には、当時リン鉱石の採掘が盛んにおこなわれていた現キリバス領のバナバに移動し、そこで警察官を務めた。一九五二年にはヴァイトゥップに戻ってフナフチ出身の女性と結婚した。同年には再びバナバに行き、そして一九六〇年に再びタラワに移動したが、一九七六年にはフナフチに移動した。一九七八年に警察官を退職し、一九八一年から一九九八年までは国会議員を務めた。二〇〇八年にニウタオに行き、四か月の滞在の後にフナフチに戻ってきた。現在は妻や息子家族ら一〇人で、

妻方の親族が従来所有していた土地に建つ家に住んでいる。

D氏(グラフ番号7)・女性・一九五五年生・ナヌメア出身

一九五五年に、ナヌメアで生まれた。一九六九年からギルバート諸島タラワで中等教育を受け、ツバルの分離後も留まり、教職課程を終えた。一九七八年にヌクラエラエ出身の男性と結婚し、同年にタラワの小学校で教鞭をとり始めた。一九八三年にフナフチに移動し、数か月滞在した後、ナヌメアに戻った。一九八四年に第三子を妊娠したが、流産の危険があつたので、病院のあるフナフチに家族と移動した。その後仕事を探すためにフナフチに留まり、一九八七年に小学校で再び教鞭をとり始めた。二〇〇一年には夫とともに高等教育機関の奨学金を得てフィジーに移動した。二〇〇三年に学位をおさめた後、二〇〇四年には夫がロースクールで勉強を続けるために、バヌアツに移動した。二〇〇六年に再びツバルのフナフチに戻り、現在では宗教団体の学校の校長を務めている。現在は夫と息子と娘の家族七人で住んでいる

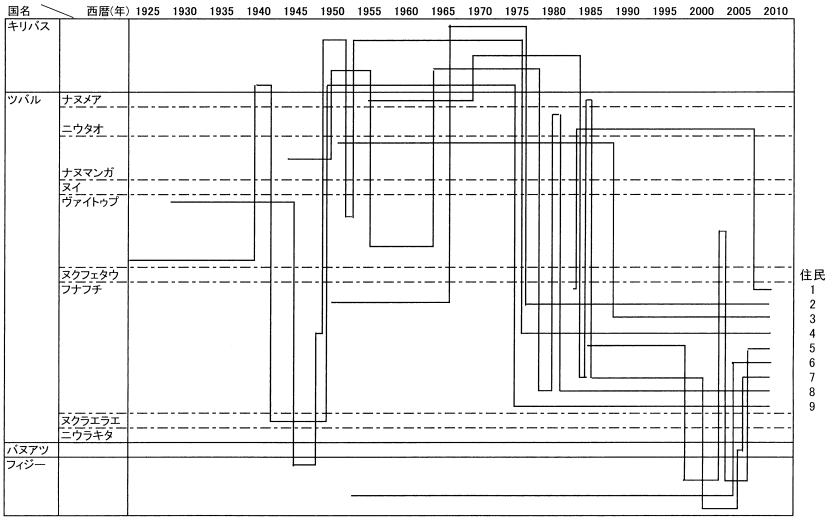


図6 住民9名の移動史

- ※1 移動は現在の国境に従って表わしている。従って、例えば英植民地領エリス・ギルバート諸島時代における内部の移動が、ツバルとキリバスの間の移動として表される場合がある。
- ※2 国家名は、北から南の順番で、上から下に記している。なお、首都の北緯を基準にしている。
- ※3 ツバルのみ、国内の9つの環礁・リーフ島レベルまで示している。北から南の順番で、上から下に記している。
- ※4 「住民」の数字は、図表8の「番号」に対応している。

(この家は学校が管理するものと思われる)。

九人全員の移動歴は、図6にまとめた通りである(図6)。ツバル内の環礁・リーフ島のあいだのみならず、かつてリン鉱が盛んでツバル人の主要な出稼ぎ先であったバナバ島が所在する現キリバスとのあいだはもちろんのこと、現フィジー、現バヌアツとのあいだでも、頻繁に移動がみられる。短いインタヴューの中で本人たちが明確に思い出した移動のみを記録したために、実際にはさらに複雑な移動があったと考えてよいだろう。

また、現居住地であるフナフチ環礁へは、上記のD氏のように宗教団体や学校の一つがある場合を除いては、A氏、B氏、C氏のように元来のフナフチ環礁出身者との親族関係を頼って移動している場合が多いことが明らかとなった。

六 考察——多様性と動態性

第四章、第五章の分析を基に、居住地と住民に関する考察を行いたい。

第一に、この三〇余年の間に急速に、居住地が

拡張したと同時に住民の数が増加したことが明らかとなった。さらに、ラグーンから内陸に向かうほど、それらの変遷は顕著であることも指摘できた。事実、フナフチ環礁のタウン・カウンシル(英名Town Council/ツバル名*Kaupule*)に勤める土地管理官(英名Lands Clerk/ツバル名*Ojisa o Manufa*)は、従来居住地はラグーン側にあったが、一九八〇年代頃から内陸へと拡張してきたと述べた。また複数の住民から、フナフチ環礁出身者は元々「ラグーン側」に集落を形成していたが、近年やってきた他環礁・リーフ島出身者が居住空間を求めて、「内陸部」、そして「滑走路側」に進出していき住宅を建設していったという意見を聞いた。言葉を換えれば、近年は人口が密集する範囲が内陸にも及んできているといえよう。

この結果は、土地利用/被覆及び建築物分布の変遷を、特に地形的特徴に注目しながら論じた山野らの結論を補強する[Yamano et al. 2007]。彼らが指摘したように、居住地は従来、ラグーンに並行して走る海抜の比較的高いビーチリッジ沿いに所在していた。しかし近年は、以前には沼地だったが一九四三年に滑走路を建設するため埋め立てられた中央凹地へも、居住地が拡張している

と考えられるのである[Yamano et al. 2007]。

中央凹地は、埋め立てられた現在でもなお海抜が低い。沼地だったときには、高潮の際にその水位が上昇することがあっても、それが「害」として認識されることは少なかったと思われる。しかし、そこに住宅が建設されるようになる、当然浸水被害として認識されるようになる。マス・メディアによって一般に、海面上昇によって「居住地が浸水すること」がセンセーショナルに報道されているが、むしろこの場合には以前からの「浸水リスク地域が居住地化する」ことが問題であると考えられる。ちなみに、中央凹地周辺に居住する住民にとって、浸水リスクがあることは想定範囲内である場合も少なくないようだ。それを裏付けるように、調査対象地区内部やその周辺で、高床の住宅や住宅建設にサンゴ礫を敷き詰めて地盤を強化する様子が見取れた(図7)。

第二に、フナフチ環礁以外の環礁・リーフ島から移動して現在この地区に居住している住民の多さと、彼/彼女らの出身地の多様性が明らかとなった。フォンガファレ島の市街地はその意味で多様な「ツバル人」によって構成されていることになる。加えて、住民がツバルの内外地、島の間の移動を頻繁に繰り返していることが



図7 サンゴ礫を敷き詰めて地盤を強化する様子  
※ 調査対象地区の「滑走路側」セクションにて、

明らかとなった。移動の理由としては、仕事、教育、そして家族・親族の存在や事情が挙げられた。いずれにせよ、生活の場の変転を必然的に伴う移動は、大事としてではなく日常的な営為として捉えられているような印象を受けた。そして、例えば他環礁・リーフ島出身者がフォンガファアレ島の調査対象地区に居住するにあたって、フナフチ環礁出身者との親族関係を頼っていたように、ひとつの島の範囲を越える社会的ネットワークこそが移動を可能ならしめる重要な背景になっているように考えられる。

上記の居住地と住民の変遷を巡る実態は、環境問題において流布されてきたツバル及びツバル人に対するステレオタイプな言説やイメージと大きく食い違う。フォンガファアレ島の市街地は多様な「ツバル人」によって構成されており、近年は人口増加と人口集中に由来する動態的な変化を経験してきている。また、住民は長距離の移動を繰り返しており、むしろ「移動に住まう」とも言える様相を呈している。彼／彼女らの多くは、現居住地のフナフチ環礁フォンガファアレ島をもまた「終の棲家」と考えておらず、インタヴューを行った九人のなかでも、将来は出身地やオーストラリアやニュージーランドへ移



動する意思を明確に持っているものがいた。

従って一般に「国土」と呼ばれるツバルの陸地は極小だが、そこに居住する住民の生活圏はむしろ広いといえる。このことは彼／彼女らの祖先たちがツバルに居住しはじめる以前から、三〇〇〇年という長きにわたって広大な太平洋を繰り返し航海してきたことと無縁ではないだろう。オセアニアの島嶼を太平洋によって繋がる世界として想起することを提唱した人類学者・作家ハウオフアの言葉を借りるならば、彼／彼女らは「Islands in the sea (海に浮かぶ島々)」のひとつにはなく、まさに「a sea of islands (島々を浮かべた海)」に生きているのである [Hau'ofa 1993]。

フナフチ環礁住民について今回の調査からは、ライフタイムという期間のなかで長距離の移住を繰り返す移動性、出身や移動・集住の時期を異にする住民が近隣を構成する柔軟性、人口圧ゆえに浸水リスク地域にさえ住宅を建設してしまう順応性が窺えた。このような実態を理解した上で、「沈むツバル」や「被害者としてのツバル人」といった言説やイメージを乗り越えない限り、住民にとって有利で現実性のある適応策に至ることは困難だろう。

## 七 おわりに——海面上昇に向けた提言の可能性

ミクロな現地調査によって照射できたローカルな実態から、地球温暖化を巡る問題に対し、どのような提言ができるだろうか。

第一に、先入観を排し改めてローカルな視点から、国土の水没や浸水・浸食、あるいは塩害等の現象について、具体的に明らかにする必要がある。その際には、それらの現象が住民の間でどのように認識されているのか—例えば、それは「害」なのか否か、その理由をどのように説明するか—ということも併せて調べなければならぬ [小林 二〇〇八a、二〇〇八b]。そうすることによって、これらの現象を短絡的に環境問題—ここでは特に地球温暖化に起因する海面上昇—to還元することなく、人口増加、人口集中、地形改変、居住地開発といった人為的要因の歴史性に十分に留意して理解することが可能になると考える。

第二に、第一の提言と重なるが、従来マス・メディアを中心に流布していた環境問題をめぐる言説とイメージにおいて、ツバル及びツバル人についての表象が偏っている／誤っていることを認識した上で、それとは異なる

ローカルな実態を描き出し、それが災害時・非常時に發揮するだろう潜在力を正當に評価する必要がある。本稿では、フォンガファレ島の市街地における居住地と住民の多様性と動態性を明らかにしながら、親族ネットワーク、生活圏の広さ、移動性、柔軟性、適応性といった特徴を指摘できた。それらは海面上昇によって起きてい／／起きるかもしれない「害」に対して、対応策を案じる際にも重要な視点を提供する。その結果、フォンガファレ島の陸地を物理的に保全するという発想に留まらず、人口増加の抑止、都市計画の推進、他島への移動手段の整備、他島の生活基盤の整備等を、具体的対策として現地住民とともに検討することが可能になると考える。

謝辞

本研究は、環境省の地球環境研究総合推進費（Ba—085 環礁上に成立する小島嶼国の地形変化と水資源変化に対する適応策に関する研究）研究課題代表者・山野博哉）によって可能になった。ツバルでの調査期間中、インタヴューに応じて下さった九名をはじめ、フォンガファレ島の住民の皆様にご協力頂いた。また本稿執筆にあたって、山口徹先生（慶大）、山野博哉先生（国立環

境研究所）、棚橋訓先生（お茶大）、小林誠氏（首都大）に有益なご助言を頂いた。この場を借りて深く御礼申し上げる。

註

- (1) 国名ツバルは「八つから成る」ことを意味している。これは独立時ニウラキタ (Niulakia) には恒常的な居住者がいなかったため、それを除く八つの環礁・リーフ島を数えたことに由来する（Institute of Pacific Studies and Extension Services, University of the South Pacific and the Ministry of Social Services, Government of Tuvalu 1983: 17）。
- (2) ツバル政府中央統計局ホームページを参照した ([http://www.spc.int/country/tv/status/Census%20&%20Surveys/Census\\_index.htm](http://www.spc.int/country/tv/status/Census%20&%20Surveys/Census_index.htm) 二〇一〇年一月二〇日現在)、二〇〇二年時点の人口である。
- (3) 日本政府外務省ホームページ参照 (<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/tuvalu/data.html> 二〇一〇年一月二〇日現在)。
- (4) インタヴューを実施するにあたって、住民は英語が話せること、日中に時間があること、という条件を満たしている必要があったために、無作為で選出したサンプルとはいえない。ただし、フナフチ環礁の市街地には、日常会話程度ならば英語を話す住民が多かった。
- (5) ここで「帰属意識を有する出身地」としたのは、それ

が必ずしも当事者の生まれたところだけではない。当事者の親が生まれたところを含む場合があるからである。表の複数の回答は、その双方を答えた場合である。

参考文献

Church, J. A., N. J. White and J. R. Hunter 2006 Sealevel Rise at Tropical Pacific and Indian Ocean Islands. *Global and Planetary Change* 53(3) : pp. 155-168.

Eschenbach, W. 2004a Tuvalu Not Experiencing Increased Sea Level Rise. *Energy and Environment* 15(3) : pp. 527-543.

Eschenbach, W. 2004b Response to John Hunter's Review. *Energy and Environment* 15(5) : pp. 931-935.

Faanui, S. 1983 Travellers and Workers. In Laracy H. (ed.), *Tuvalu : A History*. Suva : Institute of Pacific Studies and Extension Services, University of the South Pacific and the Ministry of Social Services, Government of Tuvalu. pp. 121-126.

Farbotko, C. 2005 Tuvalu and Climate Change : Constructions of Environmental Displacement in The Sydney Morning Herald. *Geografiska Annaler : Series B, Human Geography* 87(4) : pp. 279-293.

Government of Tuvalu 1980 *Funafuti Atoll and Fongafale Islands (Edition 1)*. London : Government of the United Kingdom (Directorate of Overseas Surveys) for the Government of Tuvalu.

Hau'ofa, E. 1993 Our Sea of Islands. In E. Waddell, V. Naidu and E. Hau'ofa (eds.), *A New Oceania : Rediscovering Our Sea of Islands*. Suva : University of the South Pacific. pp. 2-17.

Hunter, J. R. 2004 Comments on : 'Tuvalu Not Experiencing Increased Sea Level Rise'. *Energy and Environment* 15(5) : pp. 925-930.

Institute of Pacific Studies 1983 *Tuvalu : A History*. Suva : Institute of Pacific Studies and Extension Services, University of the South Pacific and the Ministry of Social Services, Government of Tuvalu

石田進 二〇〇七 『ツバルよ不沈島を築け——地球温暖化で「沈む」国へのエール』 芙蓉書房出版

神保哲生 二〇〇四 『ツバル——地球温暖化に沈む国』 春秋社

春日直樹(編) 一九九九 『オセアニア・オリエンタリズム』 世界思想社

小林誠 二〇〇八 a 「科学的」な言説の受容の多様性——ツバルにおける海面上昇の語りを事例に」 日本オセアニア学会 NEWSLETTER 九〇——一頁

小林誠 二〇〇八 b 「地球温暖化言説とツバル——海面上昇に関する語りと認識をめぐって」 社会人類学年報 三四 一五九——一七六頁

Montreux, C. and J. Barnett 2009 Climate Change, Migration and Adaptation in Funafuti, Tuvalu. *Global Environmental Change* 19 : pp. 105-112.

中本博皓 二〇〇五 「トゥバルの人口と経済に関するノート  
——Fongafale (Funafuti) 島の場合」 環境創造 八 三九  
一八〇頁

Tuvalu Central Statistics Division n. d. *Tuvalu 2002 : Population and Housing Census Basic Tables*. ([http://www.spc.int/prism/country/tv/stats/Publication/Pub\\_index.htm](http://www.spc.int/prism/country/tv/stats/Publication/Pub_index.htm)) 二〇一〇年一月二〇日現在)

Secretariat of the Pacific Community 2005 *Tuvalu 2002 : Population and Housing Census Volume 1 Analytical Report*. Secretariat of the Pacific Community : Noumea.

スペンサー・R・ワート 二〇〇五 『温暖化の〈発見〉と  
は何か』 みすず書房 (増田耕一・熊井ひら美(訳))

Taafaki, P. 1983 The Old Order. In Larcy H (eds.), *Tuvalu : A History*. Suva : Institute of Pacific Studies and Extension of Social Services, University of the South Pacific and the Ministry of Social Services, Government of Tuvalu. pp. 19-28.

玉井昇 二〇〇五 「ツバル環境問題をめぐる内発的側面からの一考察——廃棄物処理の現状と課題」 環境創造 八 三九—八〇頁

Teo, N. P. 1983 Colonial Rule. In Larcy H (eds.), *Tuvalu : A History*. Suva : Institute of Pacific Studies and Extension of Social Services, University of the South Pacific and the Ministry of Social Services, Government of Tuvalu. pp. 217-139.

山口徹・甲斐祐介 二〇〇七 「ビッド耕地の景観史——マ  
ーシャル諸島マジュロ環礁のジオ・アーケオロジー調査  
から」 社会人類学年報 三三三 一二九—一五〇頁

Yamano H., Kayanne H., Yamaguchi T., Kuwahara Y., Yokoki H., Shinazaki H. and M. Chikamori. 2007 Atoll Island Vulnerability to Flooding and Inundation Revealed by Historical Reconstruction : Fongafale Islet, Funafuti Atoll, Tuvalu. *Global and Planetary Change* 57 : pp. 407-416.